南山大学　図書館紀要
第 8 号（2003）41－59 頁

アントニン・レーモンドと神言修道会の会員たち
―南山大学山里校舎建築をめぐって―

加　藤　富　美

Antonin Raymond and the Divine Word Missionaries
―The Architecture of the Nanzan University “Yamazato Campus”―

Fumi KATO

抄録：本稿では，南山大学初代学長アロイス・パッヘ神父の新校舎に対する構想を明らかにし，その後神言修道会の会員たちが建築家アントニン・レーモンドと出会い，南山大学山里校舎建築に至った経緯について調査した。
キーワード：アントニン・レーモンド，Antonin Raymond，南山大学，南山学園，神言修道会，Society of Divine Word（SVD）

目次：

1.　はじめに
2.　大学設立の経緯
3.　パッヘ神父と新校舎構想
3. 1　構想のはじまり
3. 2　描かれた構想図
3. 3　構想のおわり
4.　レーモンドと山里校舎
4. 1　大学建築への取り組み
4. 2　神言会の会員たち
4. 3　建築にむけて
4. 4　レーモンドの構想
5　山里校舎の完成
5. 1　建築家レーモンド
5. 2　自然のよびかけ
5. 3　完成を祝して
6.　その後のレーモンドと神言会
7.　おわりに

写真 1　両親と筆者：背後に建築中の南山大学山里校舎（1964. 1）

上の写真は 1964（昭和 39）年のお正月の頃である。母に抱かれた私の後ろには建築中の南山大学山里校舎（現名古屋キャンパス。以下，山里校舎）が見えている。成長してこの校舎で学び，またここを職場とすることになろうとは想像もできなかったほどの幼い頃である。

加藤　富美：南山大学教育・研究事務部学術情報センター　閲覧・参考係長
原稿受理日：2002 年 12 月 17 日

1. はじめに

私は南山大学（以下，本学）の卒業生である。アントニン・レーモンド（Antonin Raymond，1888－1976．以下，レーモンド）という著名な建築家がこの校舎を建てたという事実を知らない学生時代から，この校舎の醸し出す雰囲気が好きであった。夏にはコンクリートの壁がひんやりとして，それは温度そのものというよりも太陽の強い陽射しから私達を守ってくれるように梁巡らされたコンクリートの厚い壁から受ける印象であったし，冬になればコンクリートの色がひっそりと深閑な雰囲気を漂わせ，私はその色を美しいと感じていた。この建物をレーモンドという建築家が建てたと知ったのはいつの頃だったのかもう覚えてはいない。

さて私は大学を卒業し，母校の職員になった。現在名古屋図書館の閲覧・参考係で施設や資料の管理，また利用者へのサービス全般についての業務に携わっている。本学の名古屋図書館は，山里校舎の設立と同じ1964（昭和39）年4月以来，1980（昭和55）年5月に書庫を増築したものの，建物自体は40年近くが経過し，特に資料の収容の面から機能の限界を迎えつつある。近い将来には新たな建物またはスペースが必要となるのは明白であるが，その時この建物はどうなるのであろうか。すでに建築当初には想像されなかったほど資料の媒体は変化し，かつてくつろぎやゆとりの空間であった場所には検索用のパソコンが所狭しと置かれている。また美しいモザイク模様の大理石であった床には，増大した利用者の靴音を遮断するためにカーペットが敷かれている。図書館のサービスを担当する者として，日々現実の問題とぶつかりながらやむを得ず選択してきたひとつひとつの事柄が，建物本来の美しさを失わせることになっている事実に申し訳ない思いでいっぱいである。

「建物のなかに生きている　思想を引き継げ」[1]。これは1999（平成11）年10月26日から11月6日にわたり本学名古屋図書館で開催されたアントニン・レーモンド展に寄せられた当時の図書館長浜名優美教授の詩の一節である。我々はこの建物を力を尽くして建てた人々のことを知り，その思いを引き継ぎ，次の世代に伝えていく責任があると思う。レーモンドの登場の前に，まずは本学の設立の経緯から話を進めることにしよう。

2. 大学設立の経緯

本学は神言修道会（Societas Verbi Divini：ラテン語，略称SVD，英語ではSociety of Divine Word。以下，神言会）を母体とするカトリック系の私立大学である。現

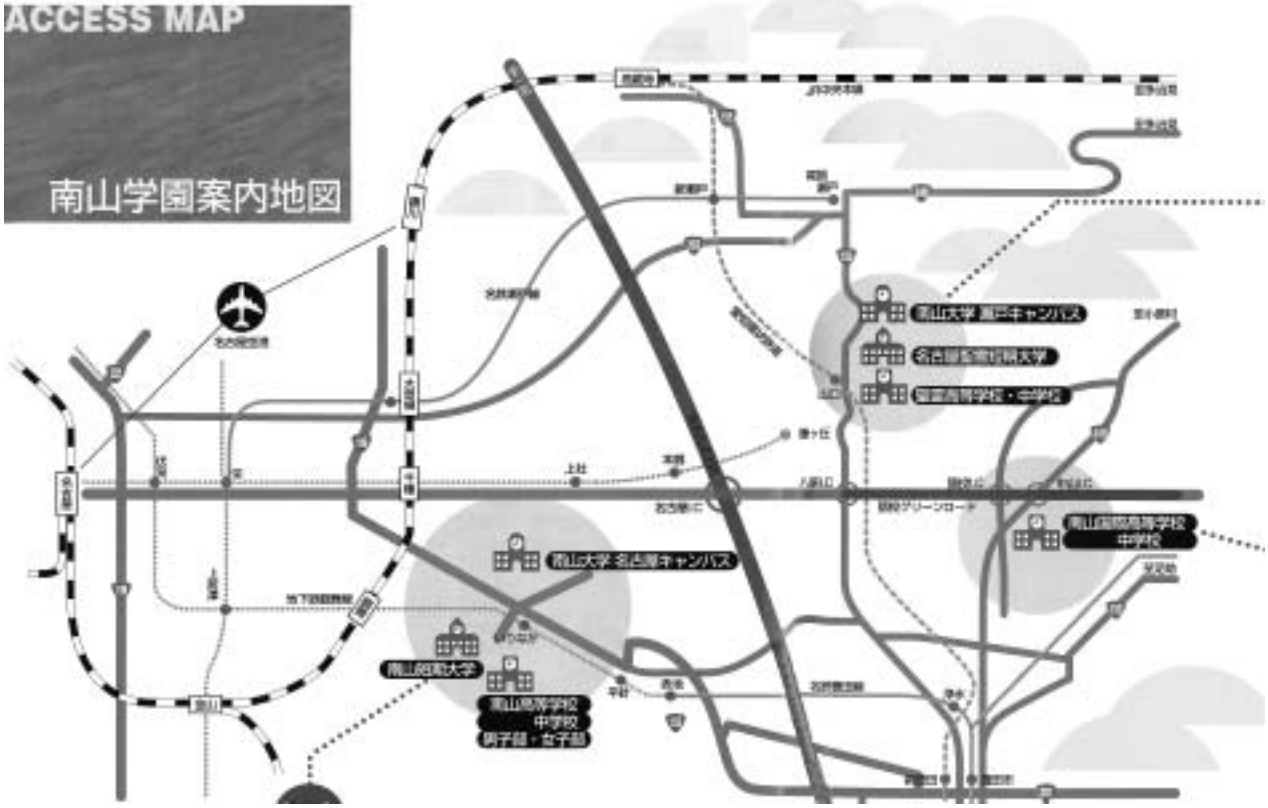

図1　南山学園各単位校配置図（『NANZAN SCHOOLS 2002』より抜粋）

在は学生数およそ 8,500 人。名古屋市昭和区山里町に位置する名古屋キャンパスに 5 学部，2000 年度に新設された瀬戸キャンパスに 2 学部を構えている。また学校法人南山学園として，別表 1 の通り，1 大学，2 短期大学，3 高等学校・中学校を擁し，3 市に跨る 6 つの単位校を有する総合学園となっている。

南山学園の経営母体である神言会は，1875（明治 8）年にオランダのシュタイルでドイツ人によって創立された男子修道会で，現在 60 カ国以上の国々で宣教事業にあたっている。

そもそも本学の設立は 1907（明治 40）年 9 月に 3 人の神言会員が初めて日本の地に足を踏み入れたことに始まる。それに遅れて 1909（明治 42）年にヨゼフ・ライネルス神父（Josef Reiners, SVD, 1874－1945）が来日し，1926（昭和 1 ）年にローマ・カトリック教会名古屋教区長に就任したことが，日本における神言会の教育事業の新しい出発点となった。ローマ教皇庁布教聖省が辞令にそえた公文書で，ライネルス神父に対し教育事業を最大の希望として要請したからである。ライネルス神父はこの要請を忠実に具体化した。1928（昭和 3）年に欧米を巡歴して寄付金を集め，名古屋市から中区広路町字五軒家（現在は昭和区五軒家町）の土地を購入。1932（昭和 7）年に，その地に南山中学校を，続いて小学校（1941 年に名古屋市に移管）を設立した。[2)]

またライネルス神父の後継者となったアロイス・パッヘ神父（Alois Pache, SVD, 1903－1969）が外国語専門学校，高等学校を設立。1947（昭和 22）年 3 月 31 日の学校教育法の公布に伴い，専門学校から大学への昇格を図り，1949（昭和 24）年に南山大学は文学部の 1 学部 4 学科を擁して誕生する。この時点で五軒家町の敷地に中学校から大学までが共存することになるのである。

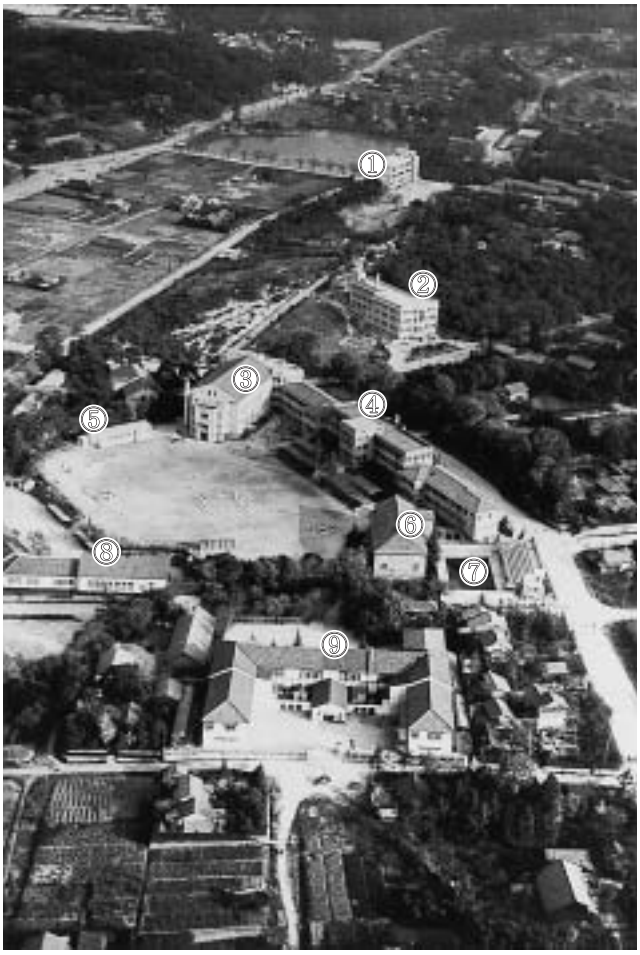

写真 2　1956～1957 年頃の南山学園とその周辺

①移転した高等学校・中学校女子部（隼人校舎）②ピオ 11 世館（学園教師館）③大学講堂 ④大学校舎本館 ⑤聖堂 ⑥至誠堂（体育館兼講堂）⑦プール⑧大学北校舎（女子部移転により大学が使用）⑨高等学校・中学校男子部

3. パッヘ神父と新校舎構想

3.1　構想のはじまり

パッヘ神父は 1903（明治 36）年ドイツ・シレジア・ヒンデンブルク市（現在のポーランド）に誕生。1931（昭和 6）年司祭に叙階され，イギリスで学んだ後，1933（昭和 8）年に来日している。「ライネルス師は南山中学校創設に着手するとき，神言会員が教師としてドイツから来任して自分を補佐し，将来は後継者となれるように，と望んだ。この希望に従って先ず選ばれたのは，アロイス・パッヘ師，次がフランツ・ザイデル師（Franz Seidel, SVD, 1904－1964）で，共に司祭になると英語研究のためロンドンに留学し，パッヘ師は昭和八年四月に，ザイデル師は昭和九年六月に日本に渡来した」[3)] とある。そしてライネルス神父の期待通り，パッヘ神父は 1948（昭和 23）年，南山高等学校・中学校長を兼務，1949（昭和 24）年 4 月に初代南山大学長に就任している。

新校舎の建設に向けて，誰よりも壮大な情熱と理想をもって取り組んだのは，疑いなくこのパッヘ神父である。『南山学園の歩み』にはその経緯が詳しく記されている。

「パッヘ学長が外専創立以来希望してきた綜合学園――幼稚園，小学校，中高校，大学，大学院までを擁する大南山の構想を語り」，「百年以上さきのことを考えて計画をたてたかった。――許されれば最初から広い場所を得て大学を建設し，学生に甘美な思い出を残させたい。しかし古い大学は小さい所からはじまった。学部組織も急いでは良い大学はできない。いずれにせよ成長しなくてはならない。そのために土地が必要である。――と未来の綜合大学のために広い土地を希望した。」

「昭和二十三年十二月九日の理事会は，隣接地の五軒

家町，駒方町，隼人町，南山町にわたる約二万坪と，将来の大学移転を考慮して楽園町，八雲町，山里町，山手通り，滝川町にわたる約十万坪を購入する案を採択。二十四年五月十五日の理事会は八雲町，楽園町，山里町方面の土地買収のため米国からの補助金四万五千弗をふりむけること，滝川町の真宗専門学校の土地と建物，南山町の土地購入その他を決議したが，これらの決定事項は昭和二十九年にかけて漸次実現されていったのである。」[4)]

3.2　描かれた構想図

南山学園史料室には『山里町大学新校舎計画』と見出しが付されたファイルが保管されており，その中には南山学園の事務職員であった松風誠人氏[5)]の『パッヘ学長の山里町新校舎構想』と題するメモと関連する資料がいくつか残されている。そのひとつがヴォーリズ合名会社（W. M. Vories＆Co.）作成の手描き図面である。日付によると大学が開学されてから5ヵ月後の1949（昭和24）年8月31日に作成されたものである。

ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（William Merrell Vories, 1880－1964）は1905（明治38）年来日し，近江八幡に近江ミッション（近江兄弟社）を設立した。宣教師として，メンソレータム販売の事業家として，また建築家として功績を残した米国人である。1910（明治43）年にはヴォーリズ合名会社を設立し，伝道事業の一環として当時積極的に学校経営に取り組んでいたミッションスクールの建築を数多く手がけており，大正年間の関西学院大学神学院をはじめ，明治学院大学，宮城女学院，昭和初期の関西学院西宮学舎，神戸女学院等が代表作とされている。

レーモンドは，ヴォーリズと彼の作品について「建築実務のために若いアメリカの建築家や学生を傭い，沢山の伝道組織に対して『建築家』として奉仕をしていた。彼の手をつけた学校，教会，別荘など今でも日本国内いたる所に散在している。その建物にはありきたりのアメリカ的変化があり，しかも使いよく，たとえ美的価値に欠けていてもある程度能率的であった」[6)]と評しており，同時代に日本で活躍した建築家ではあったが，建築家として選んだ道はまったく異なっていることがわかる。

残されている図面は原寸60㎝×50㎝ほどのもので，左上に「LAY OUT OF NANZAN UNIVERSITY NAGOYA JAPAN」，左下には「SK# DATE AUG 31 1949 SCALE 1:1200」，右下には「W. M. VORIES & CO. ARCUITECTS OMIHACHIMAN JAPAN」と記されている。

縮尺から計算すると，敷地は432,000㎡。現在の敷地の約147,000㎡と較べると，およそ3倍にあたる壮大な

写真3　ヴォーリズ合名会社作成手描き図面（1949. 8. 31作成）

構想図である。図面に描かれているのは，正門を入って正面に聖堂，聖堂の敷地をとり囲んでいるのは教員住宅であろうか，20軒ほどの住宅がみえる。そしてほぼ左右対称に校舎やホール・研究棟が並び，グラウンド，そして正門から一番奥まった中心部に大ホールがある。

松風氏のメモは「昭和二十三年十二月九日，南山学園理事会が山里町，八雲町，楽園町にわたる新大学用地購入案をきめると，パッヘ学長は，学部数も大学用地の範囲もまとまらないうちに，学部校舎，研究所，聖堂，運動場その他の将来計画をねりはじめ，これを図面にあらわして，一つの目安にしようと試みた。設計の相談相手はアメリカ人W. M. ヴォーリズ（マ）（マ）Vorris氏（Voriesの誤り）であった」と始まる。そしてこの図面が5あるいは6学部を予想した第1案であり，短期大学校舎もインターナショナルハウスと称する外国人留学生のための寮も描かれているとしている。

メモには続いて「その後パッヘ学長は更に小規模の計画として，三学部（文学部，社会科学部，経済学部）を予想し，横川建設会社に立案を委頼（マ）（マ）した」とあり，次の構想図が描かれたことがわかる。しかしながらこの図面は結局見つけることができなかった。そして「パッヘ学長は，まず小規模の設計を採択し，聖堂の位置を正面のつきあたりに移すなど変更を加え，新しい水彩スケッチを日建設計工務株式会社に委頼した。昭和二十五年のことである」とある。日建設計工務株式会社（現日建設計株式会社）は1953（昭和28）年に南山学園教師館，高等学校女子部，1955（昭和30）年に高等学校男子部を設計しており，当時より関連があったものと思われる。

この日建設計工務株式会社が描いた水彩スケッチはいくつかの写真として残されている。まずは1952（昭和27）年の3月，本学初の卒業生を送り出すための卒業アルバムの16頁にそれは見られる。「To the Foundation

Class of Nanzan University: The President's Message」と題する卒業生へのメッセージの横にこの水彩スケッチの額の前のパッヘ神父の写真が載せられている。そして同じアルバムの71頁には「This picture represents the future hopes of all Nanzanites」として当時の校舎の写真に続いて水彩スケッチそのものが載せられている。さらに108頁の日建設計工務株式会社の広告の中に「Construction Work Is Planned Here」の広告文の下に同じ水彩スケッチが描かれており，1冊の卒業アルバムの中に3回も登場している。また卒業アルバムの他にも，この水彩スケッチを背に座すパッヘ神父の姿が何枚も残されており，パッヘ神父のこの水彩スケッチに対する執心ぶりが窺える。パッヘ神父は，最初の構想よりもはるかに小さいにもかかわらず，構想図に描かれた大学を「大南山」と呼んでいたそうである。

3.3　構想のおわり

パッヘ神父が着々と将来計画を進める一方で，対外的には1951（昭和26）年10月10日付けの社会科学部設置認可申請書中（社会学部は1952（昭和27）年に設置）に「更に第二期計画として既に大半購入を終えた総坪数十万坪の新校地（現校地より一キロ弱）に新校舎建設の計画が立てられている」とある。

そして1953（昭和28）年6月22日の『南山ハイスクール新聞』第35号には「大学新校舎立案なる：落成後は高校に明渡しか」と見出しがあり，「前々から各方面から期待されていた大学校舎がいよいよ立案，実行に移される金額集金方法は今週の理事会で決定されるがおよそ十億円と推察される具体案は今秋にできる予定。ローマの許可はまだおりてはいないが，今年中にまず第一回計画の本館一部が川名中学の北にできるもよう。これは大学の学園長の建築の相談役であるモーリス氏の設計により，延坪一千坪三階建で，第一期分は五千万円の予算である。綜合大学全完成は五ヵ年計画であるが，それ以上かかるであろうと関係者はみている」と記されている。延坪1千坪ということは，約3,300㎡であり，購入した敷地と較べても，1949（昭和24）年にヴォーリズが作成した図面と較べても，あまりにも小さな第一回計画である。五ヵ年計画の全貌はどのようなものであったのだろうか。

写真4　新校舎構想図を背にしたパッヘ神父（『卒業アルバム 1952』）

写真5　新校舎構想図（『卒業アルバム 1952』）

また「落成後は高校に明渡しか」とあるように，大学の構想が話し合われる一方で，南山学園全体として校舎をどのように使用するかという議論も尽くされていたようである。『南山ハイスクール新聞』第35号が発行された直後の1953（昭和28）年11月6日には高等学校女子部が隼人町の新校舎に移転したものの，「大学落成後の現大学校舎の使用についてはパッヘ学園長の案ではこれを短大とするらしく他の一部の案では，これを高校，中学校にまわし，現女子部，高等校舎を幼稚園と，小学校が用いることになっている。しかしこの計画は十年以上はかかるとみられている」とあり，続いて「また，大学では今年中に綜合大学の建設用地の付近に小設備の完備した百名程度の学生寄宿舎一棟に着工する予定である。なお本案に対する高，中側の態度は決っていない」となっており，学園全体の混乱する状況がわかる。

そして松風氏のメモでは，1956（昭和31）年6月27日付けの神言会本部からの学長宛の書簡について触れている。それは本学経済学部設置（経済学部は1960（昭

和35）年に設置）については今後数年間校舎を新しく建てる必要がなく，現在の校舎で新学部の学生を収容できることを条件とする神言会本部の見解を示すものであった。「創立して間もない揺籃期の南山大学は，財政的な援助をローマの本部に依存していたために，日々の大学運営でも，本部にその意向を逐一うかがわなければならなかった」[7] というのが，当時の本学と神言会の関係であったと思われる。学長であるパッヘ神父はこれを受けて同年7月7日の大学評議会で，神言会本部の意向を伝え，自分の帰任を待たずに経済学部設置準備を進めるようにと頼み，南山大学は当分の間，五軒家町校舎にとどまる方針であると告げたとしている。そして賜暇休暇で帰独したパッヘ神父は，グローセ・カッペンベルク第5代神言会総長（Alois Große-Kappenberg, SVD, 1890－1957）に神言会本部に呼ばれて学長退任を命ぜられ，新校舎設立を含む将来の計画が崩壊してしまう。

1957（昭和32）年3月にパッヘ神父が学長を退任した後の様子は『大学時報』の記事から窺い知ることができる。当時渉外課長であった川添達人氏は「パッヘ学長は，名古屋市東南端，東山公園の裏手一帯の丘陵地に約六万坪の敷地を準備して，大学本部の移転を目的とし，綜合大学の偉容を計画し，将来図として教会を中心とするその理想的配置をも幾度か示されたものである。それが前学長の更迭にともない同時に変更され，杁中の現所在地に教会の建設が始められたにはちょっと驚いた」と，五軒家町校舎の近くに着工された南山学園附属聖十字架聖堂（現在の南山教会）のことを記している。そして「大学は清新の気に満ちて，草創の十年間を過し，今，第二段階ともいうべき反省と整備の時機に来ている。現在地に腰を落ちつけ，いたずらに拡張の企画におどらず，学部，学科の整備を行い，入学志望者の増と俟って教育の徹底を期している」[8] として，パッヘ神父が学長であった時代に実現は目前かと思われた新校舎の問題はこの時期休止したかのように思われる。

そしてこの年の卒業アルバムには興味深い写真が載せられている。第2代学長である沼澤喜市神父（Numazawa Kiichi, SVD, 1907－1980）の背後には，パッヘ神父の写真と同じ位置に額が掲げられている。しかしながら額の中身は異なっており，それは1952（昭和27）年3月の卒業アルバムの中の清水建設株式会社の広告のスケッチであるように思われる。そこには当時の五軒家町の大学および高等学校・中学校の校舎が描かれている。パッヘ神父が描かせた大南山構想図が外され，現校舎のスケッチが壁に飾られたのは意図的なことであろう。沼澤神父自身も「既に昭和廿四年，大学将来の拡張に備えて十万坪めざす新敷地の購入が開始されたが，大学は今のまま南山丘陵に翼をのばしていくらしい」[9] と語っている。また松風氏のメモには1958（昭和33）年から1960（昭和35）年頃にかけては「中学・高等学校男子部が新校舎に移るのが良いという意見が有力であったらしい」とある。これを裏付けるものとして1959（昭和34）年6月16日発行の『南山ハイスクール新聞』第82号には「（南山中学・高等学校男子部新校舎）着工は九月中か」とある。

4. レーモンドと山里校舎

4.1　大学建築への取り組み

一方，レーモンドの大学建築への最初の取り組みは1921（大正10）年に始まる東京女子大学総合計画である。それはレーモンドがフランク・ロイド・ライト（Frank Lloyd Wright, 1867－1959）とともに諏訪丸で来日してから2年後のことであった。戦後，駐日アメリカ大使となったエドウィン・ライシャワー（Edwin Oldfather Reischauer, 1910－1990）の父で，東京女子大学創立に尽力したオーガスト・カール・ライシャワー（August Karl Reischauer, 1879－1971）がこの仕事にレーモンドを推薦したといわれている。

レーモンドは1888（明治21）年ボヘミア地方グラドノ（現在のチェコ共和国）に生まれ，ライトの助手として帝国ホテル建設のために来日する。1919（大正8）年の大晦日，レーモンド31歳の時のことである。その後1973（昭和48）年に85歳で日本を去るまで，第二次世界大戦前までの18年間と戦後の26年間のあわせて44年間を日本に滞在して仕事をした稀有な外国人建築家である。「日本の生活と思想に密接な関係をもってすごした長年にわたる日本生活」[10] がレーモンドの建築思想にも多大な影響を与え，自然と風土に根ざした実用的で美

写真6　五軒家町の大学校舎スケッチを背にした沼澤神父（『卒業アルバム 1958』）

しい建物を作り出した建築家として知られている。

東京女子大学はライトの影響を色濃く残しているとされている建築物で，特に現存する図書館は近代日本の西洋建築として高い評価を得ている。1996（平成 8）年 7 月まで中央図書館としてその機能を維持し，現在は書庫の一部を残し大学本館としての役割を果たし続けている。

レーモンドは「私が仕事を始めた頃の学校デザインを考えると，郷愁の念にかられる」とし，この計画を「おそらく，日本では最初の大教育施設の総合計画であったろう。計画は第二次大戦後まで，何ら変更もなく忠実に押し進められてきたが，日本人の管理により，例の混乱した方法で学園を拡張するようになると，美的価値もない建物を置くようになった」[11] と記している。

途中，いくつかの大学の個別の建築物には関わったものの，再び大学の総合計画に取り組むのは戦後の 1959（昭和 34）年の国際基督教大学である。しかしながらこの計画は順調には進まなかったようだ。レーモンドは次のように辛辣な批判を繰り広げている。

「この大学計画の主任建築家に指名されたことは悦ばしいことであった。病気のため働けなくなった先任建築家の事務所の若い人びとも，相手さえ承知すれば，私は喜んで協力するつもりであった。しかしそうはいかず，私が引き続ぐことになった。」「敷地は，面積も場所も壮大であった。そこにはかつて飛行機工場だった建物の残骸とか，道路，水道本管，下水路，その他工場施設などがごった返し，先任建築家の，無秩序で弱気な努力の結果があった。新しい建物はでたらめに配置され，教会のような植民地スタイルから，建築事務所の実習生による準現代風なものまで，合理的な総合計画の跡はなかった。管理施設，図書館，教室などが旧工場の事務所の建物に入り，体育館や集会場は，廃棄された鉄骨の工場の中に計画されていた。すべては善意と節約によるもので，物を大きく見ることができない布教的な気分に支配されていた。何か本当に卓越したことのできる素晴らしい機会にめぐまれていることを，認識してはいなかったのである。私はその誤りを矯正しようと最善をつくしたが，そのつど小心な無知によって妨害された。同じく無知な教師婦人たちの，受け入れる余地もない，馬鹿げた要求にも出会った。業者と陰謀をくわだてる施主，その狭量の典型により私は片隅に追いやられ，辞任を迫られたが，私は本来図書館の専門家であった建築家，ボッブ・オコーナーと協力し，図書館だけはやってしまわなければならなかった。」[12]

結局レーモンドが手がけたのは図書館だけであったが，東洋で初の開架式図書館を作り上げた。後に出来上がった本学名古屋図書館はこれと同系の設計となっており開架式を追随している。

4.2　神言会の会員たち

さて山里校舎建設にあたっては「レーモンドは多くの神父たちとのつきあいの中で設計者に抜てきされ，すべてを相談され設計にのった」[13] のであるが，その「多くの神父たち」の中のひとりが神言会のヘンリー・ファン・ストラーレン神父（Henry Van Straelen, SVD, 1903－）ではなかっただろうか。1956（昭和 31）年 10 月にファン・ストラーレン神父が，レーモンドにより東京目黒に建てられた聖アンセルム教会について熱心な記事を書いたことが記されている。

「祈りの中から生まれたこの教会は，すべて祈りである。また大切な伝えをももたらしている。教会が現代の人間にめぐり会えたのである。つまりこの教会はわれわれの時代のものであり，その形は何かユニバーサルで，1956 年の人々に受け入れられるものなのだ。」[14]

ファン・ストラーレン神父は 1904（明治 37）年生まれのオランダ人で，自国で法学を学んだ後，1925（大正 14）年いったん来日したことが本学の記録に残されている。しかし翌年帰国し，神学校に入学して 1932（昭和 7）年司祭に叙階，1935（昭和 10）年再び来日。1942（昭和 20）年渡英し，ケンブリッジ大学で史学，東洋学，哲学等を学んだ後，本学が開学した 1949（昭和 24）年に仏語と史学を担当する教授として就任し，その後 1979（昭和 54）年まで教授職。そして任期満了による退職と同時に，名誉教授の称号を授与している。本学図書館には多数の著作が収められている。

さらに直接のきっかけとなった人物がフランシス・C・バブリック神父（Francis C. Babulik, 1909－1984）である。

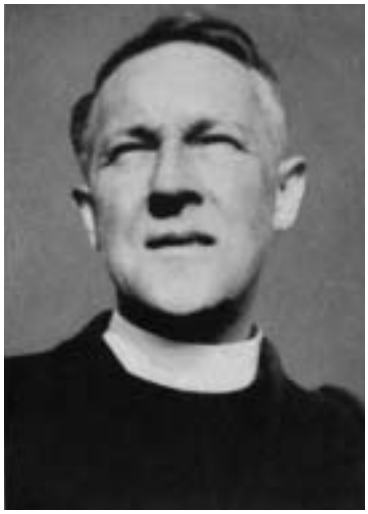

写真 7　ファン・ストラーレン神父

「1960年，私はスロヴァキア人のバブリック神父に会った。彼はアメリカ市民ではあったが，中部ヨーロッパ人の親切さとあたたかさをもち，広く旅行してどこをもわが家と考えていた。われわれは交友を始め，やがて名古屋に彼の住宅をデザインすることになった。中部ヨーロッパ人の生活習慣をもつバブリック神父は，家のデザインには自由を一切許さず，私はただ単に物理的に手伝ったにすぎなかった。」[15]

「事務所にあらわれたバブリック神父は，チェコ語を使ってレーモンドと幾度も話を交わしていたがよく文句をつける方で，さすがのレーモンドも時には折れていう通りに，平面を直すというような場面がくりかえされ」

「従って基本設計がまとめられた頃は，レーモンドの最初のすっきりした意図とは違って，次第に複雑なものになり，こまかく分かれた部屋の積みかさねのようになった。」[16]

バブリック神父は1922（大正11）年に神言会に入会し，旧制中学校の初代校長であったライネルス神父とともに若き姿が写真に残されている。当時はベニグヌス修道士として，ライネルス神父の秘書をしていたようである。「スロバキア人のベニグヌス修道士は，初め神言会の神学生になり，オーストリアのサンクト・ルペルト神学校で五年間学んだが，二七年に修道士の道に転向し，スロバキアの二つの修道院で会計や神言会出版の雑誌の販売などに従事していたという。三二年の十月に来日すると，主税町教会の司祭館を増築した名古屋教区長館に住んで日本語を学ぶ傍ら，ライネルス師を助けて名古屋教区と南山学園の会計を担当した」とある。そして1936（昭和11）年4月13日に，ライネルス神父はベニグヌス修道士を連れて学園基金確立のため，一年間の予定で欧米旅行に出発する。アメリカ，オランダ，ドイツ，オーストリアなどをめぐり学園のため十分な基金を集めて帰ってきた。「スロバキアからの移民が多いペンシルバニア州でラジオで話した時には，ベニグヌス修道士もスロバキア語で募金の依頼をなし，このスロバキア語による依頼にも，良い反応があった」[17]ことも記されており，パッヘ神父とほぼ同じ時期に来日し，南山学園を財政の面から支えていた人物であることがわかる。1939（昭和14）年神言会を離れ，アメリカの神学校に入学して1945（昭和20）年司祭に叙階。滞在中にアメリカ国籍を取得し，その後名古屋教区会計顧問を務めた。山里校舎完成後の祝別式には名古屋教区の司祭として司式に加わっている。レーモンドが建てた彼の自邸は，死後取り壊されたらしい。

「しかし一方，彼を通じて神言修道会のシュライバー神父に紹介されたのである。バブリック神父にくらべると彼は特別な啓発精神の持ち主で，人生や芸術の絶対価値について驚くべき理解力をみせた。そしてシュライバー神父は，非常に限られた予算ながら，名古屋の神言修道会による南山大学のデザインで，ほとんど無限の自由を私に与えてくれたのである。」[17]

ゲルハルト・シュライバー神父（Gerhard Schreiber, SVD, 1911－1972）は1911（明治44）年ドイツ・ホンブルグに生まれ，1938（昭和13）年司祭に叙階されると，翌年には中国に渡り北京輔仁大学でヨーロッパ中世史の講義を担当している。輔仁大学は当時神言会に属する大学で，1949（昭和24）年の共産主義政権の樹立によってカトリック教育事業が困難な状況に陥いる1950（昭

写真8　ライネルス神父（中央）とバブリック神父（右）
（1938. 12. 4）

写真9　山里校舎を祝別するバブリック神父（右から2人目）
（1964. 5. 29）

和 25）年に至るまで，「北京においてはわずか，四半世紀の存在ではあったが，3,670 名の卒業生を世に送り出した輔仁大学の学問的，あるいは文化的業績は，様々な分野に及んだ」[18] とされている。最終的には共産主義政府によって接収され，1952（昭和 27）年閉鎖された。シュライバー神父はこの大学で中国史を学び，閉鎖の前後に渡米し，アメリカで Ph. D の学位を取得している。その後 1955（昭和 30）年に『Monumenta Serica : Journal of Oriental Studies』の編集委員として来日した。もともと輔仁大学で発行されていたこの雑誌の事務局が，上記の事情により日本に移されることになったことを機に編集に加わるためと思われる。そして 1960（昭和 35）年 5 月に第 6 代南山学園理事長に就任しているので，レーモンドがシュライバー神父を紹介されたのは理事長就任の前後のことであろう。いずれにしてもシュライバー神父は「長年中国にあって，古代中国の芸術作品を収集し編集していたが，それが東洋人についての知識を与え，絶対価値の意義について共鳴することになった」[19] 人物として，レーモンドに深い信頼と尊敬の気持ちを抱かせたのである。

シュライバー神父と互いに共鳴し合った「絶対価値」について，レーモンドは次のように語っている。

「日本が教えてくれた絶対価値について，私は個人的には今も忠実である。それは私が，日本やアメリカ，ヨーロッパの仲間と語る時，常にその輪郭を確認している次に示すようなものである。」「私は，この宇宙の中に何か不思議な秩序があり，宇宙の万物はこの秩序の絶対価値に従って創られていると信じている。これらの価値は今も将来も永遠に同じであり，不変のものであろう。ある創造的芸術家は，さまざまな形の中に現われた，この宇宙と密に接することにより，絶えずこれらの価値の把握に努力し続けるに違いない。」「人生には変化とか，一時的な場面はあるが，永遠の価値という一つの知識こそ，われわれの追求することなのである。変化は不可避であり，それ自体が解決するであろう。われわれは偽りの価値，つまり流行，傾向，商業主義等，現代生活の中にわれわれをとりまいている多くの不純な影響に惑わされてはならない。」「その指導原則は，デザインする行為の中に密着させた厳格な規則へと自らを導くことであろう。人間が純粋性を求めるのは，創造の最も望ましい特質なのである。純粋とは単純性であり，事物の核心に至り，すべてを取り去ることが力強い表現への道に通ずる。」[20]

写真 10　シュライバー神父

4.3　建築にむけて

「新しい南山大学の設計をするため，シュライバー神父，私の妻，そして私の 3 人がその敷地を見に行ったのは 1961 年（昭和 36 年）の 7 月か 8 月のある大変暑い日でした。」[21]

1961（昭和 36）年 8 月 9 日の理事会の記録には「大学新校舎予定地の土地関係の準備手続が近く完了する見通しがついたので，校舎その他の建物の設計に着目することとする。先ず東京よりレイモンド氏の来名を求め，面談の上，設計を依頼するかどうかを決定する」とあるので，レーモンドが山里校舎予定地を訪れたのは 8 月であろう。そしてその時の記憶を印象的に語っている。

「私達は敷地にある岡や，谷や，狭い道や，低いがよく繁った雑木林など，敷地内を隈なく歩き回りましたが，そのうち特に私の注意を惹いたのは，尾根に続いている細い道でした。その尾根は敷地の背骨のような形をしていました。そこは四方から微風を受け，東西両方面に素晴しい眺望を持っていましたので，私はその時その場で直ぐその尾根を敷地計画の基本とすることに決めました。私は建物によって区切られた空間を通じて眺めることができるこの道路に跨って立つ数々の建物や，部分的にそれらの建物の中を一直線に突き抜けて北と南に眺望の開けた所へ通じるこの道路を目に浮かべることができました。私はその時たとえ予算が非常に限られていても，また多少の反対が起こり得るとしても，この中心となる考えを敢えて実現する決心をしました。」[22]

理事会の記録にはレーモンド以外の候補者があったとされるような内容は見当たらない。最初に「大学新校舎の建築計画について」という議題が出されたのが 1961（昭和 36）年 2 月 11 日のことである。しかしこの日には何らかの事情により審議未了となっている。そして 4 月に『新校舎建設基礎資料作成委員会』が設置されている。次に記録として残されているのが先述の 8 月 9 日のこと。レーモンドが山里校舎予定地を訪れたと思われる

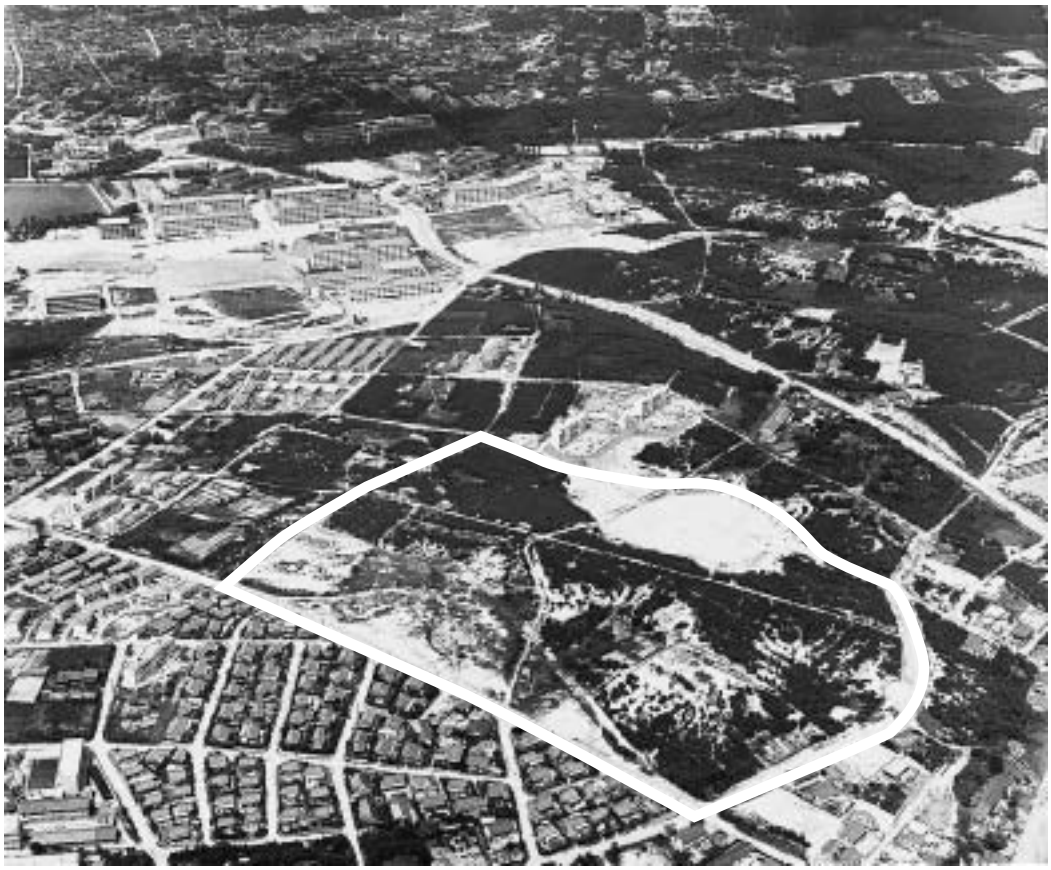

写真 11　着工前の山里校舎予定地。尾根に続く細い道がはっきりとわかる。（1962. 7）

直後の 9 月 4 日の理事会では「大学の校舎等の新築の設計をレイモンド氏に委嘱することとし，先ず，マスタープランを依頼する」とあり，文面に表れた経緯通りに受け取れば，初めての面談後 1 ヶ月も経過しないで大学全体の設計者を決定したことになる。そして 10 月には『新校舎建設委員会』が当時の学長である沼澤神父を委員長として設置され，学生部長を兼務する副学長アルベルト・ボルト神父（Albert Bold, SVD, 1908－1990），3 名の学部長，2 名の助教授，2 名の事務職員計 8 名が委員に委嘱されている。そして 10 月 19 日には早速第 1 回の会議が開催されているが，残された議事録からは，すでにレーモンドによる試案が作成されており，それに基づき会議が進められていることがわかる。図書館に全面開架式を採用するかどうかは先の新校舎建設基礎資料作成委員会でも結論がでず図書館長に一任すること，第 1 期計画が教室，研究室，事務室，図書館であること等の計画の大枠の他，研究室については，新校舎建設基礎資料作成委員会が提出した 595 坪という数字が試案では 460 坪に削減されていることに不満を持っている発言もあり，すでに数値を含めた試案であったようだ。残念ながら議事録は第 1 回のものしか残されていない。

1961（昭和 36）年 11 月 6 日には「設計者レイモンド一行を迎えて，大学新校舎の設計について審議が行われた」とあり，理事全員の他，図書館長，3 名の学部長，経理課長等が同席している。そして 12 月 11 日に「学園の新建築案等につきローマ神言会本部に事情を詳細に説明する為，2 名の理事をローマに派遣する」とあるのは，大学新校舎建築に関連して，それまでの旧校舎を使用することになる高等学校男子部校舎の増築や高等学校女子部校舎の増築も含めた一連の学園の建築についての事情説明のためであろう。1962（昭和 37）年 1 月 11 日には「大学の建設計画に関する神言会本部の方針に関する決定が通知され，（シュライバー）理事長よりこれを発表」とある。またそれに先立つ 1961（昭和 36）年 12 月 1 日発行の学生英字新聞『Nanzan Herald』第15 号は，「NANZAN MARCHES ON」の大見出しで「Nanzan launched the building program that will take ten or more years to complete」として高等学校・中学校の校舎も含めた南山学園全体の建物の見直しをすでに終了し，着手する予定であることを伝えている。そしてその中心的役割を担う人物として，シュライバー神父の言動が紹介されている。

1962（昭和 37）年 5 月 29 日には「（ヨハネス・シュッ

テ Johannes Schutte, SVD, 1913－1971．第 6 代）神言会総長の指示に従い，今後大学新校舎建設予定地内に於いては，建物の統一と美感とを保つために如何なる建物も建築家に相談せずには建造しないこととする」との理事会の記録があり，「建築家」の部分に矢印で「レイモンド」と鉛筆書きがされている。

4.4　レーモンドの構想

山里校舎の設計は，レーモンドが最初に敷地を訪れ，そして尾根に続く細い道を目にした時にほぼ決定したかのように思われる。「その土地の様子をみただけで私は即座に縦にも横にもダイナミックに広がる建築のアイディアを頭にうかべた」[23] とある。そして「きわめて魅力的なその風景と草木を，できる限りそのままにしておかなければならない」し，それが「ほとんど過ちをおかさない自然の巧妙なやり方」[24] に適合するとして，自然を傷つけず，自然の形をできるだけいかすことが何よりも優先されたのである。

レーモンドが用意された土地から即座に思い浮かべたアイディアは彼の明確な建築理念に裏付けされたものであったはずである。それはレーモンドの感じるところの「ほんとのもの」であり，シュライバー神父と共鳴した絶対価値に導かれる指導原則に基づくものであった。レーモンド設計事務所では「『これはほんとのものです』『これはうそです』『自然のもの一番良いです』など云い乍らレーモンド独特のフンイキの中で毎日の設計が進められるのであるが，Simple，Natural，economical，direct そして honest と云うレーモンドの設計の五原則はいつも各担当者の図版の上で忠実に守られるように努力されて」[25] いたのである。

「私は日本の設計哲学から得たこれらの原則を最近手がけた仕事，名古屋の南山大学の設計において厳格に守った」[26] とあり，次のように述べている。

「世界中いたるところにある陳腐で，平凡で，つまらぬ，無意味かつ偽りをそのままあらわしたような広場，柱廊，広い階段その他もろもろの金のかかった虚飾だらけの大学とはまったく異なる，日本のデザインの哲学をそのまま具体化したような大学の建物をつくるのだ。」

「もしこの建物のスケールを日本の真の伝統にしたがって『人間的』なものに保ち『記念碑的な』とほうもないものにせずにすませたら，もし私が建物のデザインを真に『機能的な』ものにでき，そしてそれをあらゆる意味で『簡素』に『直截的』にかつ『倹約』に保つことができ，構造そのものが唯一の装飾であるような設計をしあげることができたら，そのときこそ私は真に価値のある何ものかを成就しえたことになるであろう。」[27]

レーモンドの設計のために，本学からは基礎的な数値資料だけが提出されたようである。「Our present schoolrooms : Relation between sitting space and actual number of student」「Needed classroom : A comparison with the number and size of classes in last three yeas」などを含む 7 項目にわたる数値資料が残されている。

そしてレーモンドは提出された数字的な資料から，次のような手順で新しい建物群を設計する。

「設計の依頼があってまだ詳しいデーターが示される前にまず大学の総合施設についての概略的なブロックプランがいくつか検討される。次に施主から示された数字的な資料を綿密に分析して各建物別（研究棟　校舎棟　学校本部　図書館　食堂　等）の平面計画がそれぞれの担当者をきめてねられる。次に敷地測量図が示されて配置計画を進め乍ら各平面計画を再検討する。これ等の各過程でレーモンドは各担当者の間を廻ってまとめて行く。まもなく構造　設備　電気　予算の各担当者が基本計画の勉強と資料の整理をはじめる。」[28]「大学の総合施設が今回のように新しく一期に設計施工された例はあまりないが，この設計は学校側から示された数字的なデータ以外はすべて完全にレーモンドに任され，短い設計期間をもって作成された素朴な計画模型によってすべては完全に了解された。」[29]「基本的な構造は最初からレーモンドの脳中にあって　整然とした設計の秩序と統制をもって組織的に順序よくまとめられて行く。模型を作ることを云はれた時　最終的な設計はすでに決定的なものになっている。」[30]

完成した模型の側面には 1961（昭和 36）年 12 月 19 日の日付が記されている。さらに 1962（昭和 37）年 2 月

写真 12　山里校舎の模型を囲むレーモンド（中央）と建築家たち
実際に建築に携わったのはレーモンドの右側の五代信作氏（教室棟・食堂棟を担当），その右横の佐藤一朗氏（本部棟・研究室棟・体育館等を担当）。

7日付けのマスタープランにより新校舎の全貌は明らかにされた。その後，同年8月3日に第1期工事起工式が行われ，工事は開始されたのである。

5. 山里校舎の完成

5.1　建築家レーモンド

新しい校舎がレーモンドによって設計されたことについて，1962（昭和37）年12月発行の学生英字新聞『Nanzan Mirror』第10号は，「New Campus Designed By Mr. Antonin Raymond」の見出しで伝えている。そこには，新校舎は外国語専門学校以来の待望であったこと，山里町，八雲町，楽園町に跨る148,500㎡に及ぶ敷地であること，また現在の大学校舎は高等学校・中学校男子部の校舎として生まれ変わることなどが記されている。

また翌年の1963（昭和38）年7月1日発行の『Nanzan Herald』第17号にも，「Architect Antonin Raymond」の見出しで，レーモンドの肖像と記事が掲載されている。「Nanzan University made a wise choice in selecting the architect for the new university」と始まっていることから，この頃進行中であった建設工事も順調におこなわれ，レーモンドと本学の間には良好な関係が築かれていたのであろう。そしてレーモンドが今回の申し出を大学の総合建設計画に挑むまたとない機会として喜んで引き受けたことを紹介している。しかも次の2点をレーモンドの特徴として挙げていることは興味深い。そのひとつがレーモンドの詳細な設計図である。そして，それを建築会社の手抜き工事を防ぐためであるとしている。「『レーモンドは，フルサイズの図面にとてもやかましい人だったね』。吉村順三は師匠であるレーモンドの思い出を，よくそう語っていました。フルサイズの図面というのは建築細部の原寸図のことで，レーモンドはスタッフの描くその原寸図をいつも大変厳しくチェックし『赤入れ』していたのだそうです」[31] とあり，詳細な設計図のことが学生向けに解釈されて掲載されたのであろうか。さらにもうひとつの特徴は，頑丈で地震に強いけれども他の日本人建築家が用いるよりも薄い壁であり，これが低コストを可能にしているとある。これについては関東大震災にも耐えた旧帝国ホテルの建築に携わった，耐震技術を持った建築家であるという評価が及んでいたのであろう。また記事中の「A building is as good as its architect」は「建築物は建築家そのもの」とでも訳したらよいのであろうか，レーモンドがその言葉を繰り返し述べていたと記している。そして彼自身が東京の事務所から遠く離れた現場に頻繁に現れ，厳しく監督していたことを伝えている。「『南山大学』の総合計画にあたって，レーモンドは数人の所員と新幹線で現場に赴いた。それも一度や二度ではなかった。まだ山林で背の低い赤松だけが生えている，丘の上の敷地を藪をかきわけ登る」[32] とあり，このことについて本学の関係者たちも感激していたに違いない。記事は「Nanzan feels the new Nanzan is in trustworthy, capable and sympathetic hands. We are glad Antonin Raymond is our architect」の言葉で締めくくられている。

写真13　『Nanzan Herald』第17号（1963. 7. 1付）

5.2　自然のよびかけ

1年8ヶ月の工事を終え，1964（昭和39）年3月山里校舎は完成した。敷地が起伏に富んでいる上に地盤が粘土質で，ひと雨振るたびに泥濘と化し，工事は難航したらしい。しかし問題はひとつひとつ対処された。起伏する丘を巧みに利用して，大学本部（管理棟）・食堂棟・図書館・研究室棟・教室棟（南棟・中央棟・北棟・600人棟）の8棟の建物群が配置された。建物群は建築面積8,829㎡，延面積23,581㎡に跨っている。電気の配線は，美観を損なわないようにという配慮と台風の被害を考えて，すべての地下に収められた。建物の方位については特別の注意が払われ，ほとんどすべての部屋が冬は太陽，夏は涼風を受けるように南向きになっている。そして完成後40年近くを経た現在に至っても，敷地にひろがっている建物群は打ちっぱなしのコンクリートにくすんだ赤い色が施された外壁によって，自然の緑の中で，控えめな統一感と明るい雰囲気を漂わせている。

外壁に施された赤い色は象徴的である。それは工事を悩ませた粘土質のこの大地の色である。レーモンドは「日本人にとって，自然は生命の秘密を握る鍵でもある。すなわち，多年にわたって人間を守ってきた自然を裏切るべきではなく，常に間違いのない指導者として頼りに

してきた。人は，自然のよびかける材料をえらぶ。木材はその生地のままで，藁は床に敷き，砂はかべにぬる」[33]と述べている。山里校舎について関係者が語り，記した中には，この大地を表現した箇所がいくつかある。「土は乾き」「粘土質の」「地方独特の赤はだ」「赤茶けた土」「べに柄の赤」「おそらくは陶器の原料によくても，植物の生育には適していない土地」。工事は，自然の力の象徴のように横たわったこの大地との戦いであったのであろう。1997（平成 9）年 9 月 14 日付けの中日新聞市民版「愛知名作の舞台：南山大キャンパス」の記事には「完成まであと一歩と近づいたころ，コンクリートの打ちっぱなしの壁に塗る色の選択作業に入った。四種類の土が候補に上がったが，なかなか決まらない。適当な色を求め半日，大学周囲を歩き続けたレーモンドが突然，しゃがみ込んだ。『この建物が拠（よ）って建つ大地の色を塗ろう』。彼の手にはこの地独特の赤茶けた土が握られていた。塗り重ねられるうち，色は多少変わってしまったが，現在の壁の色はここからきているのだ」と，多分に誇張して，その時の様子が描写されている。

またそっけないほどの外観の内側では，大小 12 面のフレスコ画が壁を飾る。赤い色はここにも施されている。「外部と内部は一体化したものであり，したがってインテリア・デザインは，技術と同様，建築家の領域を十分に占めるべきもの」であり，「絵画や彫刻は単体であることを目標にして建築の中に存在すべきではなく，表面や空間を目的をもって活かしたり，強調するような，はっきりした力をもつことができる」[34] としている。建物に施されたフレスコ画やレリーフはすべてレーモンドによってデザインされた。そしてこれらの絵画や彫刻を通して，教育の場へある「はっきりとした力」が与えられたのである。建物群の中に点在する絵画や彫刻は，まるで建物全体に広がる静かでやわらかい力を凝縮してそこに配置されているかのように思われる。描かれたフクロウは英知を，ハチは勤勉，ユリは清純，ハトは平和，サンカクとエンは聖霊と神の父を，そして黒く縁取られた十字架を中心に左右にキリストの恵みを表す白い光が広がり，この建物の中で「真の教育」が行われることを，この建物に足を踏み入れた人々に静かに告げている。

写真 14　尾根に跨って建つ第一研究室棟
打ちっぱなしのコンクリートに赤い色が施された外壁は今もそのままである。

写真 15－1　教室棟廊下沿いのフレスコ画

写真 15－2　教室 600 人棟（G30）ロビーのフレスコ画

フレスコ画は 14，5 世紀を最盛期としてイタリアを中心に栄えた壁画の画法で，上質の石灰を水分と化合した液を壁に塗り，生かわきの湿って新鮮な（イタリア語でフレスコ）状態の時に上から絵具を溶かし込んで描かれる。石灰中に含まれている石英質がこの絵具の上にのり，空気に対して一つの被膜を作り不変の色彩が残るとともに，壁自体も堅牢となる。また顔料は岩やサンゴ，宝石等，自然の不変の物質を基にしているので変化しない。レーモンドは山里校舎に先立つ，高崎市の群馬音楽センター（1956－1961）にこのフレスコ画を取り入れている。

後の 1973（昭和 48）年に増築された M 教室棟の外壁

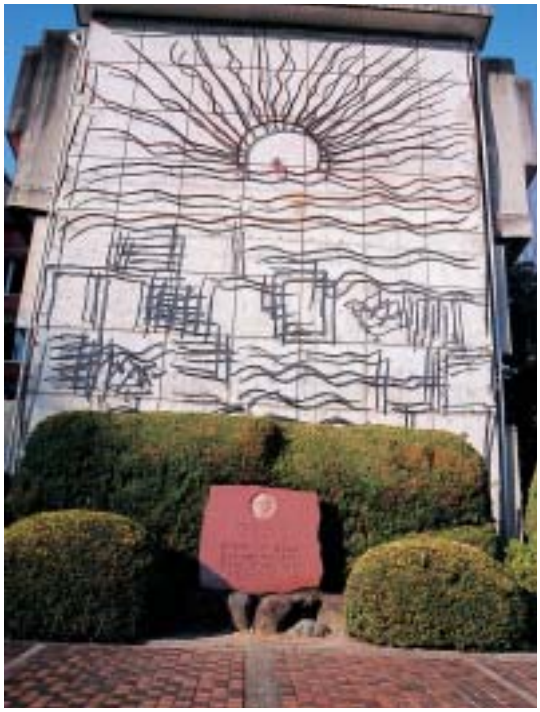

写真16　M教室棟外壁の鉄製レリーフ
手前のパッヘ初代学長記念碑には「1948年この地を新校舎の為に選ぶ」と彫り込まれている

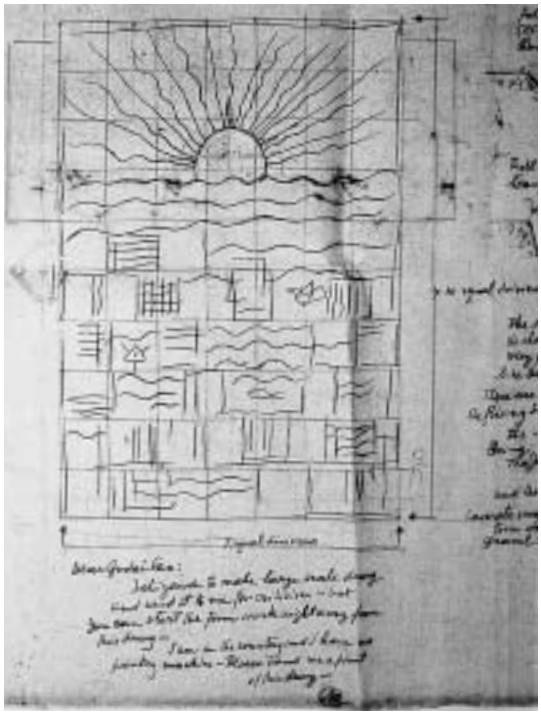

写真17　鉄製レリーフのためのレーモンドのスケッチ（1972. 8作成）
「Dear Godai San」に始まる，建築家五代信作氏宛てのメモが添えられている。

にはレーモンドがデザインした鉄製のレリーフが壁面いっぱいに拡がっている。そこにもフレスコ画と同様のモチーフが繰り返し使われている。日の出のタイヨウ，ハト，サンカクとキリストの象徴であるサカナ。そしてレリーフは，レーモンドが意図した通り，「描かれたスケッチそのままに，自由でのびのびとした感じ」に表現された。鉄は月日を経て，錆びた赤い色になり鈍い光を放っている。

5.3　完成を祝して

当初，第1期工事の研究室棟と教室棟が完成する1963（昭和38）年8月に予定されていた移転は，学生からの要望もあり，結局1964（昭和39）年4月9日から19日にわたっておこなわれた。4月20日より新校舎での授業開始，5月29日に新校舎祝別式，翌30日に新校舎落成式，6月27日に父兄新校舎参観と，山里校舎完成を祝う一連の行事が行われている。そしてボルト神父の手で，新校舎の礎石の中には，教職員名簿，アルバム，工事関係者の名簿，写真，式典参列者の名前などが納められた。落成式ではノエミ夫人を伴ったレーモンドがボルト神父から感謝状を受け取る姿が写真に残されている。

しかし，完成を祝うこの日，パッヘ神父もシュライバー神父もこの場に同席することはなかったのである。1964（昭和39）年3月22日の理事会の記録では，パッヘ神父ならびにすでに離日していたシュライバー神父，その他山里校舎設立に尽力した神言会の会員たちを落成祝賀会に招待することになっている。そして5月22日の記録には，「両神父から参加したいという返事があった」とあるが，なぜか同月29日には「外国よりの来賓はすべて不参とする」ことが記されている。

1965（昭和40）年5月，レーモンドは南山大学の建築設計に対して昭和39年度日本建築学会賞を受賞した。受賞の根拠は「高価な仕上材の美しさや特異な構造体の奇抜さに頼ることなく，与えられた自然との調和と機能的な校舎群との結びつきのなかから，これまでに見られなかった大学校舎群の新しい空間的秩序を創造したことは，高く評価されなければならない。よってこの作品に対し日本建築学会賞を贈ることとなった」[35]とある。

6．その後のレーモンドと神言会

レーモンドは南山大学が完成した後も，次々に神言会の建物に取り組むことになり（別表2），それは彼の晩年の仕事の非常に大きな部分を占めている。これは，レーモンドとシュライバー神父の「親密な関係」によるものだとされている。「この親密な関係は，東京渋谷の『SVD（神言会）修道院』（1963－64）になり，名古屋の大学の

写真 18　完成した山里校舎（1964. 7）
①大学本部（管理棟）②食堂棟 ③図書館 ④研究室棟
⑤教室南棟 ⑥教室中央棟 ⑦教室北棟 ⑧教室 600 人棟

写真 19　礎石に名簿などを納めるボルト神父（1964. 5. 29）

写真 20　落成式典でのレーモンド（1964. 5. 30）
ボルト神父から感謝状を受け取る。ノエミ夫人とともに。

写真21　現在の山里校舎（名古屋キャンパス）

隣地に『SVDセミナリー（神言神学院）と教会』（1964－66）を設計するように発展した。さらにはフィリピンのセブ島の『サン・カルロス大学総合計画』（1965）となり，アイルランドのメイヌースの『アイルランドSVD修道院（ホステル）』（1966）を計画することにもなっていった」[36] とあり，次々と取り組んだ足跡は，レーモンドの作品が神言会本部を満足させるものであったことを物語っている。1956（昭和31）年当時にファン・ストラーレン神父が，レーモンドの聖アンセルム教会に対して「われわれの時代のものであり，その形は何かユニバーサルで，1956年の人びとに受け入れられるものなのだ」と賞賛を与えたそのままに，その当時の神言会の会員たちに受け入れられたことは間違いない。そして1976（昭和51）年10月25日に米国ペンシルベニア州ニューホープの自宅で死去したレーモンドの日本での追悼ミサは，この聖アンセルム教会でおこなわれたのである。

7. おわりに

山里校舎建築に取り組むレーモンドの姿を，ぜひ本学の立場から描いてみたいと思い取りかかったが，残された資料がほとんど無かったこと，またかなり月日が経過したこともあって経緯に詳しい関係者の話を伺うことができなかったことなどから，十分に書き記すことができなかったように思う。神言会にまつわる建築物はレーモンドの晩年の仕事の非常に大きな部分を占めている。依頼した神言会がレーモンドの作品を好意的に評価していたことは疑いようもないが，それがシュライバー神父ひとりだけの評価であったとは思えない。レーモンドが国内のみならず海外に至るまで，次々と神言会の建物に携わった背景はいったいどのようなものであったのだろうか。

私の原稿は学園史料室に残された松風氏のメモ書きに支えられてのことである。古い書類の裏側に記憶を辿るように丹念に記された数々のメモ書きは，松風氏の本学に対する思いの深さを量るに十分過ぎるものである。またレーモンド設計事務所相談役の佐藤一朗氏には東京の事務所でお話を伺い，貴重な写真もお借りすることができた。佐藤氏のお話では，工事が開始されてからはボルト神父が南山大学側の窓口として当時のレーモンド建築設計事務所との交渉にあたっていたようであり，レーモンドの意図を十分に理解し，良き協力者としてこの大仕事に尽力していたという印象をお持ちのようである。

ボルト神父は1908（明治41）年ドイツ・ラインファ

ルツに生まれ，神学をドイツ，イタリアで学んだ後，1934（昭和9）年に司祭に叙階されると，翌年の1935（昭和10）年に来日している。1951（昭和26）年文学部の教授に就任した後は，課外活動課長，学生指導司祭として学生生活に関わっている。そしてシュライバー神父の後任として，この山里校舎建築の渦中である1963（昭和38）年に第7代南山学園理事長に就任した。その後の21年間にわたるボルト神父の理事長の時代に，本学は新しい地で大きな飛躍を遂げることになる。山里校舎の建築にあたっては「きわめて魅力的なその風景と草木を，できる限りそのままにしておかなければならない」というレーモンドの思想に共感し，建築中に樹木を切る場合には，たとえ一本の木であっても理事長の許可を必要とした。さらに山里校舎の完成後には，この赤土の丘陵地に適当な樹種の調査を専門家に依頼し，1万本以上の幼木の植樹を計画的に行うなど積極的に自然環境の保護にあたった。そしてレーモンドが現場を訪れた際には必ず面会して意見を交わし，徹底的に討論し，建築現場にも同行したとのことである。当時施設課長として工事を見守られた南山学園名誉職員山本勇郎氏は，時間があれば建築現場に出かけ，自らコンクリート打ちの手伝いをしていたボルト神父の姿を記憶に留めていらっしゃるそうである。いずれにしても緑繁る今日のキャンパスはレーモンドの建築思想とそれを陰で支えたボルト神父の功績と言えよう。

またバブリック神父についてカトリック名古屋教区に問い合わせた際には，野村純一司教様より直接丁寧な返事をいただき大変恐縮した次第である。御手紙には「バブリック神父と知り合って長くなりますが，こうして改めて思い起こしてみますとほとんど彼のことについて知らなかったことに気付きました」とあった。本稿のために貴重な時間を割いていただいた方々に厚く御礼申し上げたい。

1969（昭和44）年6月5日，パッヘ神父はアメリカからドイツへ戻る途中，12年ぶりに日本に立ち寄り，山里校舎を訪れている。その旅は重い病を従えての故郷への帰国の途中のことであった。松風氏のメモ書きには，「病中の同師は，ボルト師の案内で新校地西側の市道を北から自動車で走り，正門内に入って車の中から大学校舎を眺め渡した。あとでパッヘ師は『思っていたより敷地は狭く，校舎も大きくはなかった』と語った（これを伝え聞いたボルト理事長は『歩いてみれば広いことがわかるのだが』といったが）。昔パッヘ学長が描いた未来図よりはるかに大学用地は狭く，校舎面積も少ないようである。パッヘ師離任後，土地はかなり手放されている。楽園町の市営分譲住宅の土地，丸紅飯田の社宅用地などその一例である」とその時の光景が記されている。パッヘ神父はそれからわずか一ヶ月余り後の7月24日，故郷ドイツに帰ることなくこの名古屋の地で逝去された。

これより6年後の1975（昭和48）年9月10日，本学第二研究室棟の新増築校舎祝別式に際して序幕をおこなったパッヘ初代学長記念碑には次のように彫り込まれている。

「アロジウス・パッヘ神父　初代学長　1949－1957
1948年この地を新校舎の為に選ぶ」

注・引用文献

1）浜名優美．やっと50年，さらに50年：南山大学50周年記念「秋の企画展」に寄せて．1999.
2）南山学園．南山学園の歩み．名古屋：南山学園，1964．p. 2～14に詳しい。
3）南山学園　前掲書，p. 18.
4）南山学園　前掲書，pp. 92－95.
5）南山学園名誉職員
松風誠人氏は1905（明治38）年生まれ。月刊誌『聲』，週刊『日本カトリック新聞』，『カトリック新聞』等の編集に携わった後，1950（昭和25）年南山学園に入職。総務部，教務部，学生部等を経て1970（昭和45）年定年による退職。『南山学園の歩み』は松風氏が「全く個人的な興味でまとめた草案」を基に，急遽学園史としてまとめられたことがあとがきに記されている。ここでは南山大学創立直後の1951（昭和26）年頃までのことが取り上げられており，学園史料室に保管されている数々のメモ書きはそれに継ぐ学園史執筆の参考資料として記したものではないかと思われる。
6）アントニン・レーモンド，三沢浩訳．自伝アントニン・レーモンド．東京：鹿島研究所出版会，1970．p. 70.（以下，自伝）
7）南山大学五〇年史作成小委員会．南山大学五十年史．名古屋：南山大学，2001．p. 50.
8）川添達人．“大学めぐり：南山大学”．大学時報．Vol. 6, No. 12，pp. 32－33（1957. 11）
9）“インタビュー：新任学長（南山大学）沼沢喜市氏”．大学時報．Vol. 6，No. 16，p. 42（1958. 3）
10）アントニン・レイモンド．“日本建築への帰依”．芸術新潮．Vol. 15，No. 8，p. 77（1964. 8）（以下，芸術新潮）
11）自伝　前掲書，p. 255.
12）自伝　前掲書，p. 255.
13）三沢浩．A・レーモンドの住宅物語．東京：建築思潮研究社，1999．p. 87.（以下，住宅物語）
14）自伝　前掲書，p. 243.

15）自伝　前掲書，p. 257.
16）住宅物話　前掲書，p. 88.
17）青山玄．ライネルス師とその人柄．名古屋：南山学園，1994．p. 32～36 に詳しい。
18）自伝　前掲書，p. 257.
19）山辺美津香，栗山義久．“資料紹介：布教用要理解説図版”．南山大学図書館紀要．Vol. 6，pp. 9－10（1999. 5）に詳しい。
20）自伝　前掲書，p. 257.
21）自伝　前掲書，pp. 257－258.
22）アントニン・レーモンド．“自然と建築：南山大学の設計について”．建築．Vol. 48，p. 42（1964. 9）（以下，建築）
23）建築　前掲書，p. 42.
24）芸術新潮　前掲書，p. 78.
25）自伝　前掲書，p. 258.
26）五代信作．“南山大学の総合計画と平面計画”．近代建築．Vol. 18，p. 95（1964. 9）（以下，近代建築）
27）芸術新潮　前掲書，p. 77.
28）芸術新潮　前掲書，p. 78.
29）近代建築　前掲書，p. 95.
30）五代信作．“南山大学”．建築文化．Vol. 19，No. 215，p. 119（1964. 9）
31）近代建築　前掲書，p. 95.
32）中村好文．“軽井沢の「新スタジオ」を訪ねて”．住む．No. 1，p. 28（2002）
33）三沢浩．アントニン・レーモンドの建築．東京：鹿島出版会，1998．p. 188.（以下，レーモンドの建築）
引用中には「新幹線で現場に赴いた」とあるが，新幹線の開通は 1964（昭和 39）年 10 月 1 日であり，時期的に矛盾がみられる。山本勇郎氏の話では，レーモンドは現場を訪れる際にはいつも 3 日がかりで，定宿に 2 泊していたとのことである。
34）アントニン・レーモンド．私と日本建築．東京：鹿島出版会，1967．p. 13.
35）自伝　前掲書，p. 296.
36）日本建築学会．"南山大学"．建築雑誌．No. 957，p. 555（1965. 8）
37）レーモンドの建築　前掲書，p. 188.

写　真

1）両親と筆者：背後に建築中の南山大学山里校舎．1964. 1 撮影（筆者私物）
2）1956～1957 年頃の南山学園とその周辺．（『南山大学五十年史写真集』p. 37）
3）ヴォーリズ合名会社作成手描き図面（1949. 8. 31 作成）．（図面は学園史料室）
4）新校舎構想図を背にしたパッヘ神父．（『1952 年卒業アルバム』p. 16．学園史料室）
5）新校舎構想図．（『1952 年卒業アルバム』p. 71）
6）五軒家町の大学校舎スケッチを背にした沼澤神父．（『1958 年卒業アルバム』p.（2）．学園史料室）
7）ファン・ストラーレン神父．（『1952 年卒業アルバム』p. 29）
8）ライネルス神父とバブリック神父．1938. 12. 4 撮影（大学史料室）
9）山里校舎を祝別するバブリック神父．1964. 5. 29 撮影（学園史料室）
10）シュライバー神父．（学園史料室）
11）着工直前の山里校舎予定地．1962. 7 撮影（学園史料室）
12）山里校舎の模型を囲むレーモンドと建築家たち．（レーモンド設計事務所佐藤一朗氏より借用）
13）『Nanzan Herald』第 17 号（1963. 7. 1 付）．（新聞は学園史料室）
14）尾根に跨って建つ第一研究室棟.
15）フレスコ画.
16）M 教室棟外壁の鉄製レリーフ.
17）鉄製レリーフのためのレーモンドのスケッチ（1972. 8 作成）．（スケッチは学園史料室）
18）完成した山里校舎．1964. 7 撮影（学園史料室）
19）礎石に名簿などを納めるボルト神父．1964. 5. 29 撮影（『南山大学五十年史写真集』p. 80）
20）落成式典でのレーモンド．1964. 5. 30 撮影（大学学長室）
21）現在の山里校舎．（大学学長室）

別表 1　南山学園の各単位校

学　校　名	所　在　地
南山大学　名古屋キャンパス 瀬戸キャンパス	名古屋市昭和区山里町 18 瀬戸市せいれい町 27
南山短期大学	名古屋市昭和区隼人町 19
南山高等学校・中学校男子部 南山高等学校・中学校女子部	名古屋市昭和区五軒家町 6 名古屋市昭和区隼人町 17
南山国際高等学校・中学校	豊田市亀首八ツ口洞 13－45
名古屋聖霊短期大学	瀬戸市せいれい町 2
聖霊高等学校・中学校	瀬戸市せいれい町 2

別表 2　神言会に関係するレーモンドの作品

年　代	年　齢	建　築　作　品	所　在　地
1961（昭和 36）	73	聖霊病院及び修道院（計画）	名古屋
1961（昭和 36）	73	聖霊病院教会（計画）	名古屋
1961－62（昭和 36－37）	73－74	バブリック司祭邸	名古屋・千種
1962（昭和 37）	74	南山大学総合計画	名古屋・昭和区
1962（昭和 37）	74	SVD 多治見寮	愛知・多治見
1962－64（昭和 37－39）	74－76	南山大学研究室棟	名古屋・昭和区
		南山大学教室中央棟	
		南山大学教室南棟	
		南山大学教室北棟	
		南山大学教室 600 人棟	
		南山大学図書館	
		南山大学食堂	
		南山大学管理棟	
1963－64（昭和 38－39）	75－76	SVD 修道院	東京・渋谷
1964－66（昭和 39－41）	76－78	SVD セミナリー（神言神学院）及び教会	名古屋・昭和区
1965（昭和 40）	77	サン・カルロス大学総合計画	フィリピン・セブ島
1965（昭和 40）	77	新発田カソリック教会	新潟・新発田
1966（昭和 41）	78	アイルランド SVD 修道院（計画）	アイルランド・メイヌース
1967－68（昭和 42－43）	79－80	南山大学体育館	名古屋・昭和区
1970（昭和 45）	82	南山大学女子短期大学	名古屋・昭和区
1973（昭和 48）	85	南山大学校舎増築	名古屋・昭和区